MEIJI GAKUIN

明治学院 日本はじめて物語

The First Stories

第4集　キリスト教文化と自由な学風

明治学院は日本でもっとも古いプロテスタントの学校です。

宣教師たちは近代的日本語辞書を始めとして、聖書の和訳、西洋音楽、文学、社会事業など、それまでの日本になかった活動を進めていきます。

米国のカレッジを目指して建学された明治学院は、普通学（教養学）を中心としたカリキュラムで、個人を大切とするリベラルな学風です。

第二代総理井深梶之助は「パン（実学）にあらでむしろカルチュール（教養）、忠君愛国に偏せずして上帝（神）を敬畏するをもって知恵の本となす」と教育方針を述べています。

この学院の自由な雰囲気は、芸術・文学・宗教・音楽・社会事業にとどまらず、学院の豊かな土壌は科学技術の分野でも人物を育てました。

「明治学院 日本はじめて物語」過去の展示

第1集 ［ヘボン博士編］

- 民衆を救ったはじめての西洋点眼目薬
- 近代「男女共学」のさきがけ「ヘボン塾」
- はじめての日本語（和英）辞典『和英語林集成』
- ヘボン式ローマ字の考案者
- ヘボン博士の手術と西洋義足のはじめて（澤村田之助）
- はじめての日本語全訳聖書（明治訳）
- 初の外国人専用リゾートホテル金谷カテッジ・イン

第2集 ［創設者たち編］

- 国内初の新聞はヘボン邸での出会いから（海外新聞）
- 日本最初の女性英語教師 牧野よし（1843-1930）
- 世界初の指紋研究者 フォールズ博士
- 日本最初の盲人用特殊教育教科書（フォールズ博士と楽善会）
- 著作権（出版権）成立のはじめて（ヘボン博士）
- はじめての日本語会話書 “Colloquial Japanese”（S.R.ブラウン博士）
- 横浜初の気象観測と日本研究学会 Asiatic Society（ヘボン博士）
- ネイティブの発音をはじめて記載した英和辞書—薩摩辞書（フルベッキ博士）
- フルベッキの手引きで蝋型電胎法による活字が製作される

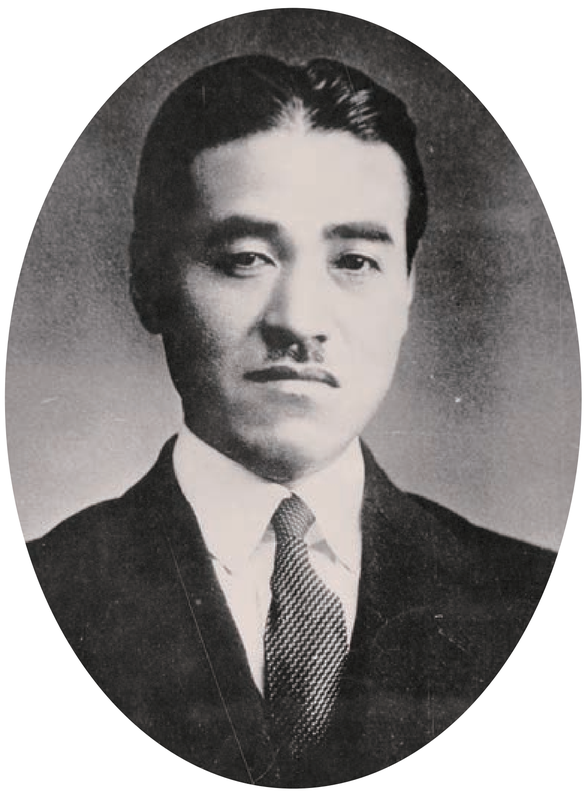
第3集 ［社会事業編］

- ハンセン病患者の生活施設—目黒「慰廃園」
- 日本初の生存権裁判「朝日訴訟」と天達忠雄教授
- 精神病者福祉のパイオニア—谷中輝雄と「やどかりの里」
- 身体障害者援護事業とリハビリテーションのはじめて 益富政助
- 社会的ボランティアの初めて賀川豊彦と明治学院学生たち
- 口話法聾話学校とライシャワー夫妻
- 雪国のはじめての盲学校—大森隆碩
- 日本初の盲人用特殊教育教科書は「聖書」

明治学院歴史資料館

『キリスト教綱要』翻訳とダンテ全集刊行

中山昌樹（なかやま まさき 1886-1944）



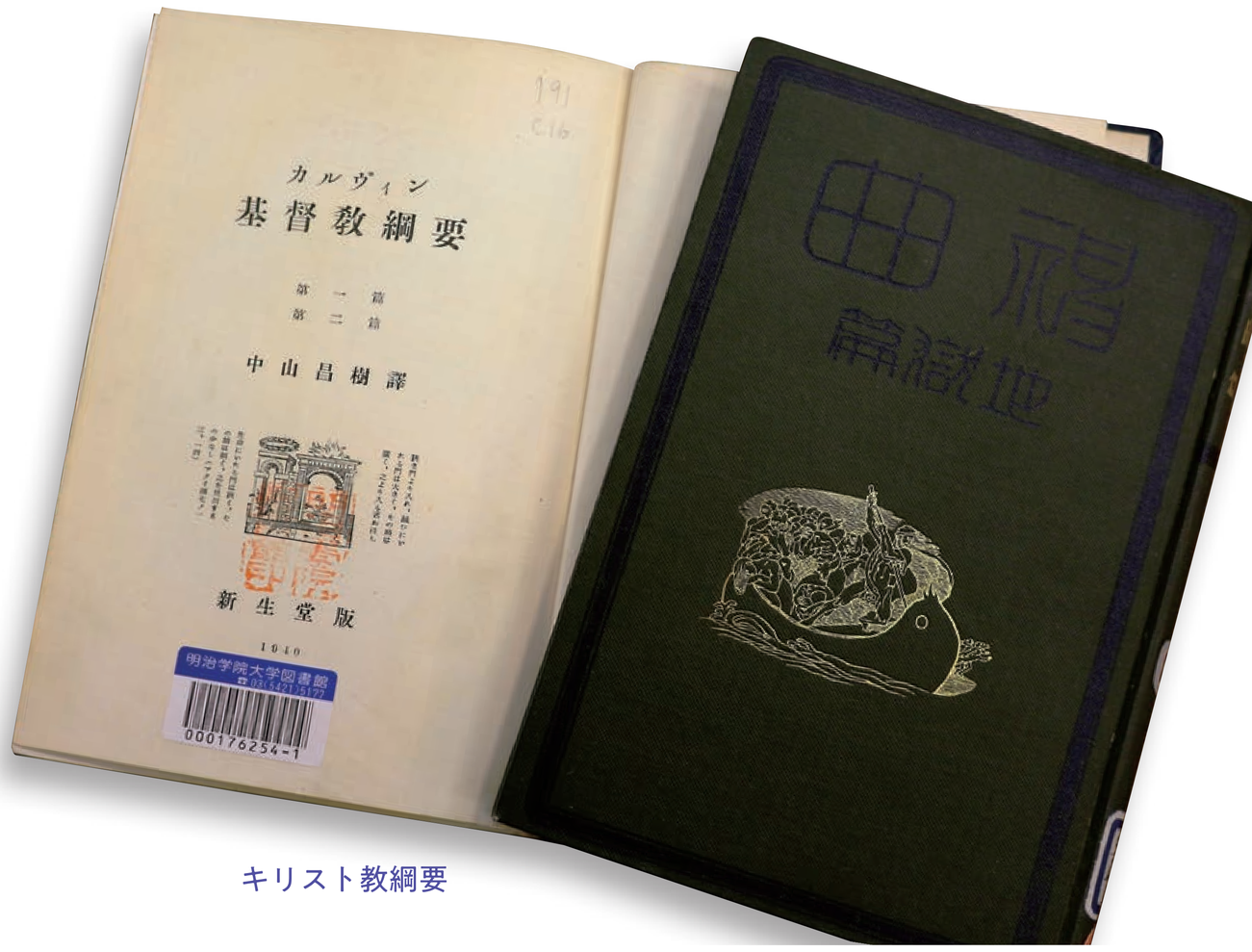
中山昌樹

ジャン・カルヴァン著『キリスト教綱要（Christianae Religionis Institutio）』は宗教改革に最も大きな影響を与えた書である。アウグスティヌスの『懺悔録』、トマス・アクイナスの『神学大全』と並びキリスト教三大著作といわれる。このプロテスタント初の神学書は、初版が1536年スイスのバーゼルでラテン語で印刷され、最終本文は1559年の第5版であり、フランス語訳も刊行された。

この重要な神学書を、日本語翻訳として初めて成し遂げたのが明治学院高等学部教授の中山昌樹である。訳文はラテン語本文の意味を十分に伝えるために考え出された逐語的口語訳（欧文翻訳体）であり、1934年新生堂から刊行された。

第二次世界大戦前のアジアにおいて『キリスト教綱要』が全訳として存在したのは日本のみであり、高度な神学書の翻訳を成し遂げた中山の業績は偉大である。この後同書は30年後の1962年に至って渡辺信夫も翻訳している。

中山はイタリア最大の詩人ダンテ・アリギエーリの作品の翻訳をも手がけ、キリスト教精神の理想を高く掲げた不滅の古叙事詩『神曲』1万4233行をイタリア語より訳出し、詩集『新生』とともに1917年に出版した。さらに日本初の「ダンテ全集」10巻を1924年から1925年にかけて出版している。



キリスト教綱要

同僚の鷲山弟三郎は中山昌樹を「赤貧に屈せず、権門に頼らず、超然と独自の道を言う風格はダンテその人を思わせた」と述べ、戦時中は時流に迎合せず「まあやらせてみるさ、まずい事はどうせ自然にダメになろうじゃないか」と超越した視点で見ながらも、攻撃を受けると牛若のように身を翻して敵に空を打たせる俊敏さがあったと伝えている。

中山の蔵書約2000冊は「中山昌樹文庫」として明治学院大学図書館に所蔵され、基督教綱要の原稿も400字原稿用紙3457枚におよぶ。これは空襲の中、学院の皆が防空壕に運び込んで守ったものである。

基督教綱要原稿

（注）中山の他の代表的翻訳・著書：アウグスティヌス『神の都（抄訳）』・ミルトン『失楽園物語』・『詩聖ゲーテ』『詩聖ダンテ』など

MEIJI GAKUIN

明治学院

日本はじめて物語

The First Stories

日本初のユーモア作家

佐々木 邦（ささき くに 1883-1964）

佐々木 邦

佐々木邦は日本最初のユーモア作家である。昭和初期のサラリーマン家庭の日常と少年少女の明るさを描いて、『少年倶楽部』の人気作家であった。

明治学院高等学部学生時代の佐々木邦は成績優秀で人望が厚く、学生寮ヘボン館のモニトル（舎監）となって賀川豊彦と同時代を過ごした。卒業後マーク・トウェインの作品に接し、明るく健康でいたずら心と正義感のある作品に惹かれ「その表皮の下に虚偽の世に対する熱烈な憤激があり、その笑いの陰には苦い涙がひそんでいる」と感じて翻訳を続けるうち日本では少ない初めてのユーモア作家となっていった。

邦の作品は中流知識人家庭を舞台に、大人社会の諧謔や偽善や常識に対し、少年の目にふと浮かび上がる健全な合理主義の世界を描いた。当時主流の落語風の口調あわせの諧謔とは異なるユーモアの世界を誕生させた。鶴見俊輔は彼のユーモアの質について「（サザエさんの）長谷川町子の作品は昭和初期の佐々木邦のユーモア小説の世界を継ぐもの」と作風を述べている。鶴見はカツオ君の持つ鋭く明るい少年の合理主義を語っているのだろう。

少年少女向けの『いたづら小僧日記』は好評を博した作品である。『苦心の友』（1927 ～ 29）、『村の少年団』（1930 ～ 32）、『少女百面相』（1932）、『トム君サム君』（1933）などが続き、昭和初期には佐々木邦の作品は講談社の全雑誌に連載され、『愚弟賢兄』（1928）や『ガラマサどん』（1930）はベストセラーになった。

1936年に佐々木邦は「ユーモア作家倶楽部」を結成し、辰野九紫・獅子文六・北村小松・徳川夢声・サトウハチロー・中野実らが加わった。機関誌の「ユーモアクラブ」編集責任者は邦となったが、太平洋戦争の期間中1942年から1945年まで、佐々木邦は執筆を一切しないという不屈な態度を貫いていく。戦後は明治学院文学部教授となって英語と英文学を教えた。

『凡人伝』（1946）は明治学院の学園生活と青山学院時代を混ぜて創作された、自伝的青春ユーモア小説であり、冒頭から「私たちの母校明治学園は字音「飯が食えん」に通じる」と書き始める。

戦後の代表作『赤ちゃん』（1958）と『明治学院生活』に掲載された「母校に脱帽」の原稿は明治学院大学図書館が所蔵している。

佐々木邦編集『明治学院生活』

自伝的小説『凡人伝』

明治学院歴史資料館

明治学院

日本はじめて
The First Stories
物語

永井直治牧師

新契約聖書各版

日本人の手で新約聖書を ギリシア語本文から初めて和訳 『新契約聖書』(1928年刊)

❖

永井直治
(ながい なおじ 1864-1945)

新契約聖書とメモなど

永井直治は明治学院の前身である築地大学校・東京一致英和学校から明治学院神学部に進み、1890年に卒業後長野県小諸町や佐久の岩村田町での布教を経てヘボンゆかりの教会とされる千葉県の九十九里教会、そして台東区の浅草教会に着任した。

大正改訳の『新約聖書』の訳語に疑問を持ち、20年以上のギリシア語研究の成果を基に、聖書の原典であるギリシア語新約聖書を日本人として初めて翻訳し1928年4月に『新契約聖書』を刊行した。これは大正末期に至りキリスト教の神学的理解が進み、日本人も独自でギリシア語から翻訳できるまでになったことを示している。新契約聖書は1932年の第三版まで改訂され、戦後には1960年の修正改版が出版されている。

底本はロベール・エスティエンヌ(ラテン名ステファンス)がパリで1550年に発行した『ギリシア語聖書第3版』であり、内容はエラスムスの第4・第5版に近く、ギリシア語の共通本文ないし標準本文としてヨーロッパで広く、特にイギリスで受け入れられていた本文である。実際の訳には1872年のF.スクリブナーの復刻版を使用し、ネストレ版も参照して翻訳している。

内村鑑三はこの『新契約聖書』初版の序文で「君は日本人として聖書の日本化の最初の試みを為したのである」と記した。ギリシア語原典は英訳聖書や漢訳聖書、和訳聖書の元文であり、日本人が宣教師の手を借りず単独でギリシア語から訳出した最初の聖書は、いまもギリシア語聖書の研究に参照される。

この『新契約聖書』は明治学院大学図書館の「聖書和訳デジタルアーカイブス」で閲覧でき、永井直治牧師の記録や書簡は明治学院歴史資料館が所蔵している。

MEIJI GAKUIN

明治学院

日本はじめて

The First Stories

物語

モダンピアノの日本はじめて

S.R.ブラウン牧師のピアノ

神奈川成仏寺でのブラウン牧師とヘボン博士の家族。左より2人目がS.Rブラウン、4人目がゴーブル、中央がヘボン（横浜開港資料館所蔵）

S.R ブラウン牧師

キリスト教の歴史は音楽と切り離せず、礼拝やミサでは楽器が使われ、パイプオルガンはその王者である。

パイプオルガンは、イエズズ会の宣教師ヴァリニャーノが1579年長崎に持ってきたとされ、近江の安土と豊後の臼杵、肥前の有馬に置かれたのが初めてといわれ、パイプは竹製であったと伝えられる。

ピアノは18世紀に現代ピアノの前身フォルテピアノが登場するが、1823年シーボルトにより、日本で最初のフォルテピアノが長崎にもたらされた。そして現代の金属枠に鋼鉄弦（ピアノ線）のモダンピアノを日本に最初に持ち込んだのは、明治学院の創設者の1人S.R.ブラウン牧師が1859年に持ってきたと推測される。

ブラウン牧師とともに11月に到着した、新聞記者であり後に横浜にウオルシュ・ホール商会を設立したフランシス・ホールは1859年12月30日付の日記で、ブラウン牧師の家族とともに神奈川湊へ到着したピアノの陸揚げの様子を日記に記している。

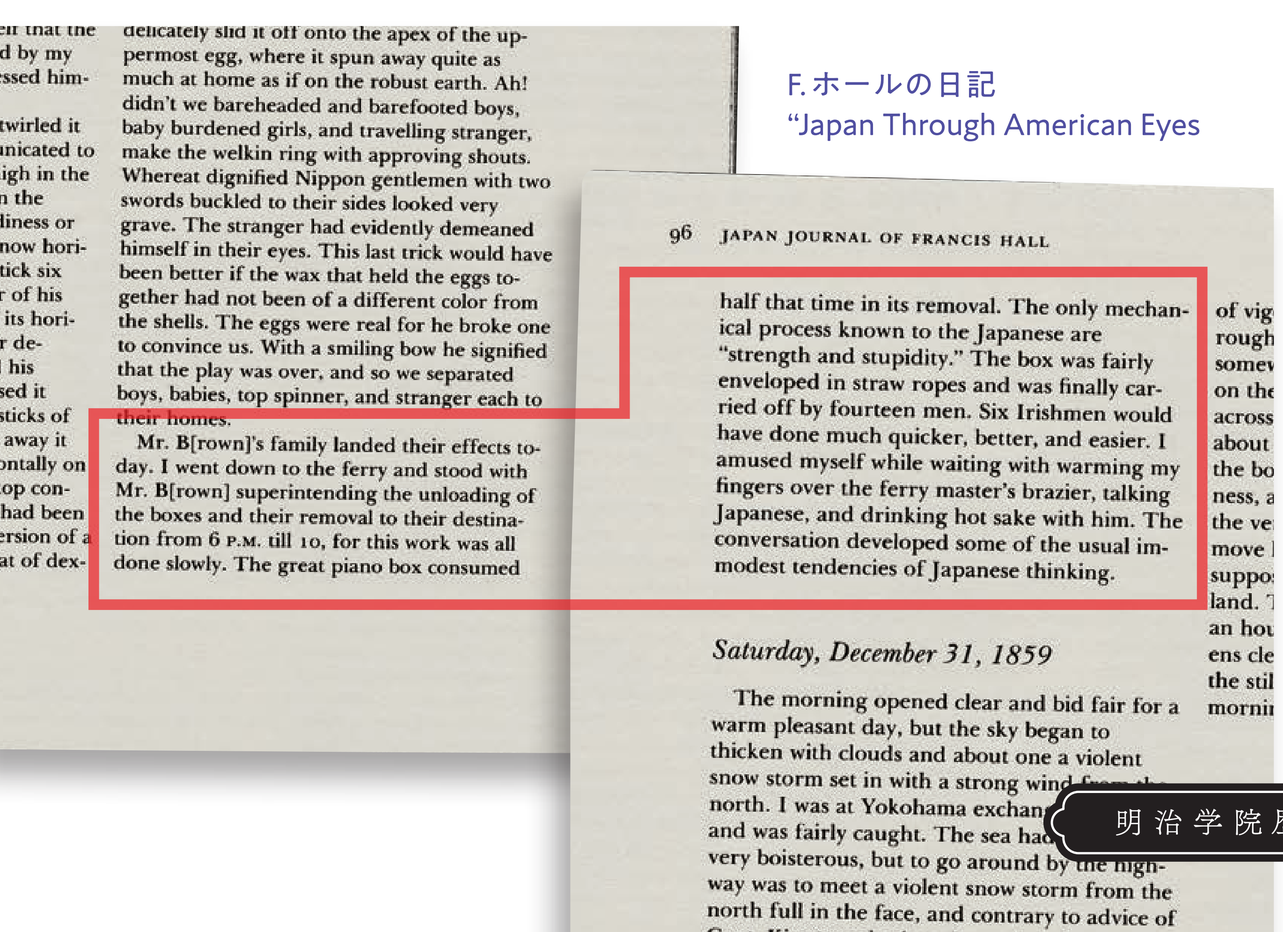
「*私は船着き場に行ってB（ブラウン）氏とともに陸揚げと移動に立会ったが、仕事が万事悠長なので午後6時から10時までかかってしまった。その時間の半分は大きなピアノの箱を移動するのに費やされた。日本人が知っている唯一の物理的方法は「力と愚鈍」だ、箱は縄でぐるぐる巻きにされ14人がかりでようやく運ばれた。*」*

これほどの重量と大きさを持つピアノは当時米国で主流となった金属フレームのモダンピアノ以外に考えられない。フォルテピアノは木製フレームで極めて軽いからである。

このピアノはヘボン夫妻・S.R.ブラウン夫妻・ゴーブル夫妻の住む神奈川宿の成仏寺に運び込まれた。ここには他にもリードを使ったオルガンも既に持ち込まれており、共に外国人の礼拝に使われた。

この後、讃美歌や軍楽による西洋音楽の流入はすさまじく、1881年の文部省音楽取締掛の編纂した「小学唱歌集初篇」でも、収録曲は讃美歌の旋律か民謡が極めて多く、原曲と全く異なる趣旨の日本語歌詞をつけたものだった。オルガンやピアノで奏でる讃美歌の曲は同じでも、帝国の教育目的に沿って使われていったのである。

（＊）Francis Hall "Japan Through American Eyes" より伊藤久子訳



F.ホールの日記
"Japan Through American Eyes

delicately slid it off onto the apex of the uppermost egg, where it spun away quite as much at home as if on the robust earth. Ah! didn't we bareheaded and barefooted boys, baby burdened girls, and travelling stranger, make the welkin ring with approving shouts. Whereat dignified Nippon gentlemen with two swords buckled to their sides looked very grave. The stranger had evidently demeaned himself in their eyes. This last trick would have been better if the wax that held the eggs together had not been of a different color from the shells. The eggs were real for he broke one to convince us. With a smiling bow he signified that the play was over, and so we separated boys, babies, top spinner, and stranger each to their homes.

Mr. B[rown]'s family landed their effects today. I went down to the ferry and stood with Mr. B[rown] superintending the unloading of the boxes and their removal to their destination from 6 P.M. till 10, for this work was all done slowly. The great piano box consumed

96 JAPAN JOURNAL OF FRANCIS HALL

half that time in its removal. The only mechanical process known to the Japanese are "strength and stupidity." The box was fairly enveloped in straw ropes and was finally carried off by fourteen men. Six Irishmen would have done much quicker, better, and easier. I amused myself while waiting with warming my fingers over the ferry master's brazier, talking Japanese, and drinking hot sake with him. The conversation developed some of the usual immodest tendencies of Japanese thinking.

Saturday, December 31, 1859

The morning opened clear and bid fair for a warm pleasant day, but the sky began to thicken with clouds and about one a violent snow storm set in with a strong wind from the north. I was at Yokohama exchan and was fairly caught. The sea had very boisterous, but to go around by the highway was to meet a violent snow storm from the north full in the face, and contrary to advice of

明治学院歴史資料館

明治学院

日本はじめて物語

The First Stories

①

②

①YMCA東山荘での翻訳委員の集会
②都留邸での翻訳委員の気晴らし
（都留仙次 画）

口語訳聖書初版と
宣教100年版

改訳委員のサイン

口語訳聖書（全文口語和訳）の初めて

❖

明治学院長 **都留仙次**（つる せんじ 1884-1964）

明治学院大学長 **村田四郎**（むらた しろう 1887-1971）

聖書の和訳には明治学院の人々が大きな役割を果たしてきた。

最初の聖書全文和訳は本学院創設者J.C.ヘボンとS.R.ブラウンが翻訳した1880年の「明治（元）訳」である。その後日本語の近代化が進む中で新約聖書のみ改訳した「大正改訳」が成立し、二度目の聖書全文和訳は戦後の1954年の「口語訳」である。

太平洋戦争中の1942年、日本聖書協会は大正改訳で取り残された旧約聖書の改訳を求め「旧約聖書改訳中央委員会」を都留仙次委員長ほか20名で組織し、詩篇・ヨブ記などを訳し始めていた。しかし、戦後の当用漢字・新かなづかい制定を期に新約聖書の翻訳を優先することとし「新約聖書改訳委員会（村田四郎委員長）」の下で、大正改訳の新約聖書を現代仮名遣いと当用漢字で書き改め、ルカ伝などを組版まで進めた。しかし翻訳委員会はここまで進めたものの表現の書き直しではなく、新たな「口語体訳」として聖書の二度目の全文和訳を行うことを協会に求めた。

そこで日本聖書協会は旧約・新約両聖書の全文和訳を目指し、「聖書現代語訳委員会」を1950年12月に組織した。旧約は都留仙次を委員長として委員に手塚儀一郎・遠藤敏雄、新約は松本卓夫を委員長として委員に富森京次・村田四郎が選ばれている。

その後富森が高橋虔に、村田が明治学院大学長に着任のため新約改訳コンサルタントとなり山谷省吾に交代して、翻訳委員は都留の御殿場の別荘とYMCA東山荘で集中して翻訳を行った。

こうして明治訳聖書に続く二度目の聖書全和訳として、『聖書 口語訳』は1954年に完成し、ベストセラーとなって普及していった。

明治学院大学図書館は村田四郎用のゲラ刷や翻訳委員サイン入りの特装版の聖書を所蔵している。

《聖書の口語体での翻訳の試み》

日本語の変化とともに、その時々での話し言葉での翻訳は試みられており、井深梶之助（第二代明治学院総理）の『新約聖書馬可伝 俗話』1881刊が最初の試みである。戦後は賀川豊彦の指揮下で渡瀬主一郎・武藤富男（のち明治学院院長）が『新約聖書（口語）』をキリスト新聞社から1952年に出版している。

―明治学院大学図書館「聖書和訳デジタルアーカイブス」参照―

日本はじめての古式パイプオルガン

明治学院礼拝堂の三代目のオルガン

白金チャペルのオルガンは、初代が1914年の米国メーソン＆ハムリン社製のリードオルガン（港区有形文化財）、二代目は1966年設置のドイツ、ヴァルカー社製のパイプオルガンであり、2009年設置の現在のパイプオルガンは三代目となる。

パイプオルガンはバロックの巨匠バッハの時代（17 ～ 18世紀）に建造技術の黄金期を迎え、ヨーロッパ各地の教会に作られ、一部は今も現存して美しい音を響かせている。ところが19世紀の産業革命以降、歴史的製作法を伝承せずに工業的な大量生産を繰り返した結果、製作技術が途絶えてしまった。

そして20世紀に製作された大量生産のオルガンが昔のオルガンよりも早く老朽化し始めるに至り、美しい音色と耐久性を持つオルガンの秘密はその製作法と材料にあることがわかった。そこでオルガン製作者と学者達は「失われた歴史的製作法」を研究解明する機関をスウェーデンのヨーテボリ大学に作り、その製作法を再現した。

現在の明治学院のオルガンは、この研究機関のメンバーであるオランダのオルガン製作者ヘンク・ファン＝エーケンが製作し、昔の材料と製作法を忠実に再現した世界で4台目、日本では初めてのパイプオルガンである。

製作には、明治学院のキリスト教理念に基づく2つの考えが反映されている。

- プロテスタント礼拝式の特徴である、集う全員が声を揃えて歌う讃美歌を伴奏するのにふさわしい音色と音量
- ヨハン・セバスティアン・バッハのオルガン全作品が演奏可能な音色と規模

こうして、17世紀から18世紀の中部ドイツ・オランダ様式で製作され、2段手鍵盤と足鍵盤、33種類の音色（ストップ）、2045本のパイプを持つオルガンは、W.M.ヴォーリズ設計の建造100年を超える明治学院礼拝堂と共に、学院のキリスト教精神を表す大切な顔となった。

オルガンは入学式や卒業式、コンサートに留まらず、毎日の礼拝での歌声に合わせて奏でられる。希望者は演奏技術を習い、礼拝・クリスマス行事・オープンキャンパス等の行事で演奏でき、「キリスト教学校ならではの教材」としての役割も果たしている。

明治学院
日本はじめて
The First Stories
物語

写真提供：一般財団法人安藤研究所

「第二のマルコーニ」明治学院中学時代に多極真空管を発明

❖

安藤 博（あんどう ひろし 1902-1975）

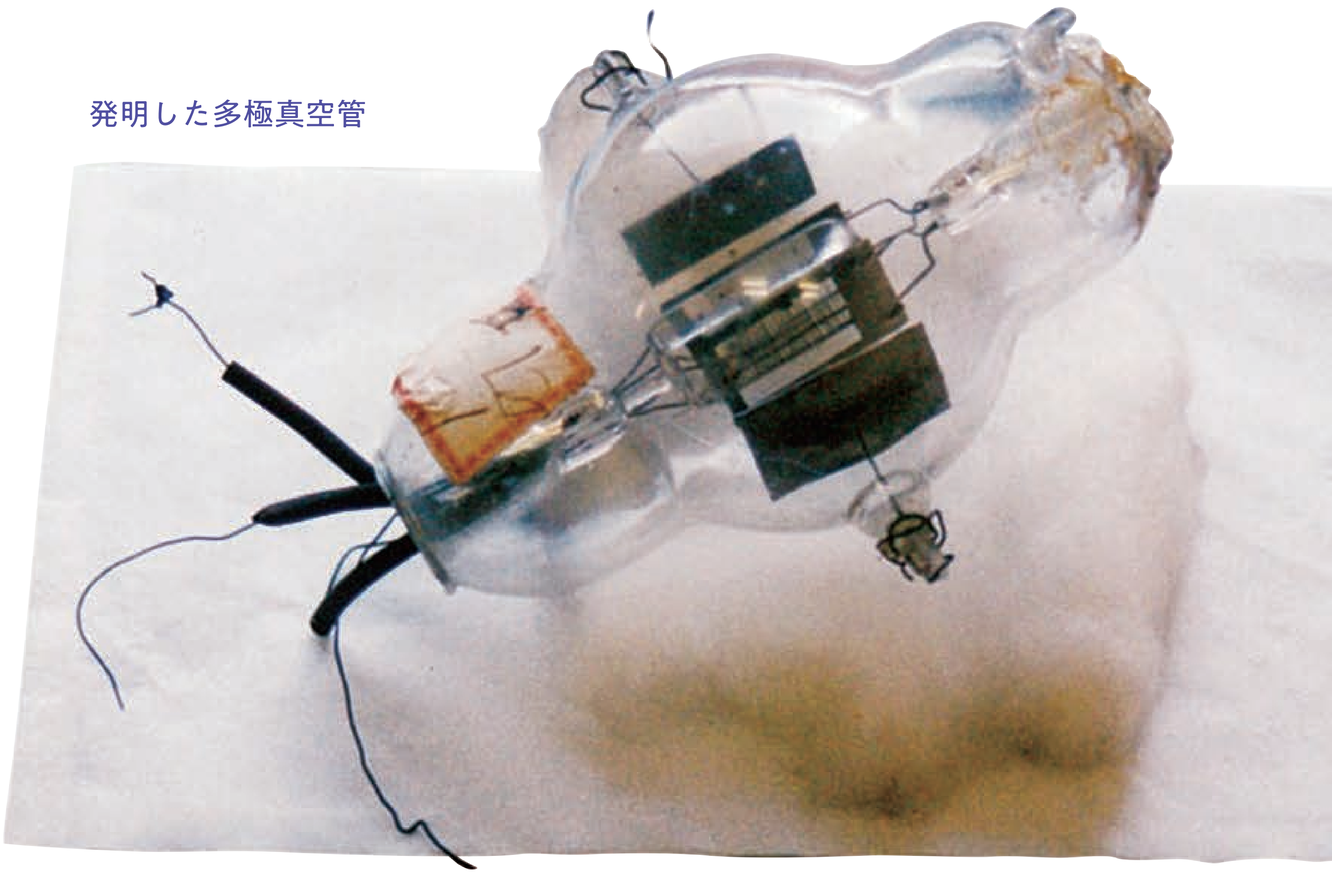
学生時代の安藤博

安藤博は日本の誇る電子技術者であり、世界的発明家である。

明治学院中学（旧制）に1915年に入学し、ドイツ製の分子式真空ポンプを購入し、自宅で1500個ほどの真空管を試作して「多極真空管」を発明すると、1919年1月13日中学4年生の時に17歳で3つの特許として出願した。

多極真空管は世界に先駆けた発明であり、この真空管により高周波電気信号増幅技術が実用化され、無線通信やラジオ・テレビ・FAX・レーダーなどが発展していくことになった。

安藤はまた中学3年生の時、明治学院の記念祭において神学部長都留仙次教授の許可を得て校内を結ぶ無線通信の実験を行った。この3年後に世界で初めてアマチュア無線局が開局された時代である。学院は英語教育が盛んであり、教育方針も自由主義的であったことが、彼の無線の世界を広げるのに大いに役に立った。



発明した多極真空管

1920年明治学院を卒業すると安藤は早稲田大学理工学部予科に入学した。1922年に著書『無線電話』を早稲田大学出版部から学生として出版すると、10万部以上のベストセラーとなり、無線電話を世界で初めて成功させた鳥潟右一博士はこの書で安藤を「第二のマルコーニ」と評している。

安藤はこの印税収入を得て、1922年に発明王エジソン、1929年に無線電信の父マルコーニに会い激励されている。しかし彼は大学の試験成績は良いものの授業はほぼ出席せず、一時除籍されかけるというエピソードも起している。

安藤の世界に先駆けた特許は他にも1922年のラジオ受信機の「ニュートロダイン受信方式」がある。松下幸之助はこの特許と真空管の特許を買い取って公開し、日本のラジオが広く普及していった。

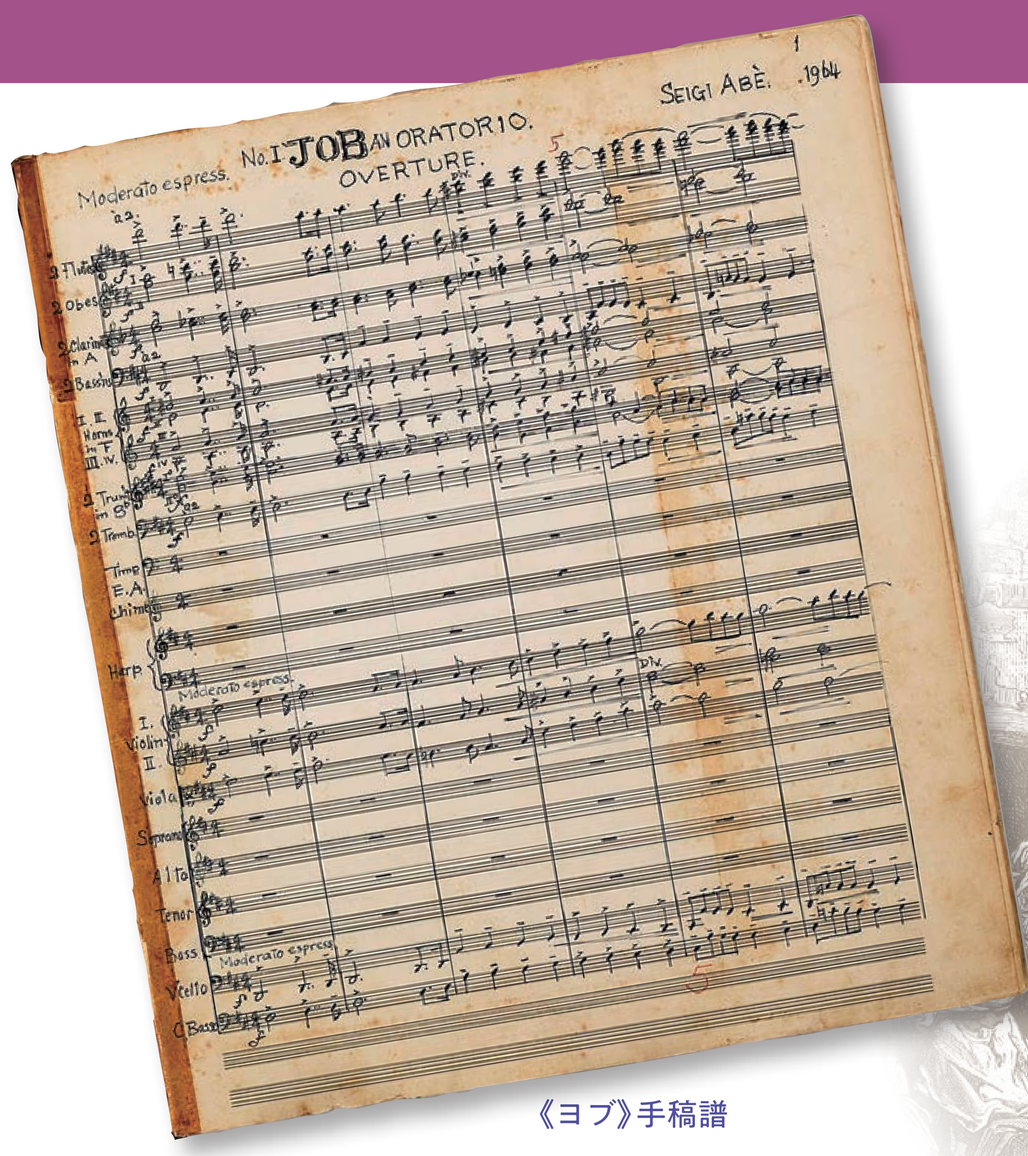
安藤は日本最初の電信電話のアマチュア無線局を開き、関東大震災で通信や放送の必要性を感じてNHK（日本放送協会）の発起創設者となり、1925年にラジオ放送が始まると、翌1926年にはラジオ映画装置（テレビジョン）で特許を取り、1929年2月1日には日本で初めて映画放送の名前でテレビ実験放送を行った。

後年の安藤博

明治学院

日本はじめて物語

The First Stories



《ヨブ》手稿譜

オルガンを弾く安部正義

ギュスターブ・ドレ挿画
『聖書』よりヨブ

ヨブモスクワ演奏会パンフ

日本最初のオラトリオ《ヨブ》

❖

明治学院音楽主任 **安部正義**（あべ せいぎ 1891～1974）

オラトリオとは宗教的・道徳的テーマを取り扱った声楽曲。日本ではバッハの「クリスマス・オラトリオ」やヘンデルの「メサイア」、ハイドンの「天地創造」などが有名であり、声楽と管弦楽との大規模な曲として演奏される。

日本での最初のオラトリオ作品は《ヨブ》である。作曲者の安部正義は讃美歌121番「馬槽のなかに」の作曲者として良く知られ、その旋律はテーマとして《ヨブ》の中にも繰り返し登場する。

安部は1928年にオルガン奏者木岡英三郎の後任として明治学院講師に着任し、高等商業部教授となり、音楽主任として活躍した。≪ヨブ≫の作曲は1930年から始め1945年頃にはほぼ完成したが、ピアノ・ヴォーカル・スコアの出版は1965年のクリスマスとなった。日本での学校音楽は校歌や応援歌に留まることが多いが、≪ヨブ≫はキリスト教文化を伝える明治学院の貴重な音楽文化を構成している。

オラトリオ《ヨブ》記録

●**楽譜初版出版**（1965/12/25）ピアノ・ヴォーカル・スコア

●**楽曲初演**（1967/5/21）パイプオルガン伴奏
明治学院礼拝堂／指揮:池宮英才　オルガン:園部順夫　合唱:明治学院グリークラブ

●**管弦楽版初演**（1969/5/25）
東京文化会館／指揮:池宮英才　オーケストラ:東京管弦楽協会　オルガン:吉田実　合唱:東京混声合唱団・東京女子大学クワイヤ・オラトリオ合唱団・二期会合唱団　主催:日本基督教文化協会　後援:朝日新聞厚生文化事業団、NHK厚生文化事業団、キリスト新聞

◇**オルガン伴奏による再演・再再演**（1969/6/14・1975/6/28）
明治学院礼拝堂／指揮:池宮英才　オルガン:園部順夫　合唱:明治学院グリークラブ

◇**レクチャーコンサート**（2012/11/17）
明治学院大学アートホール／構成:歴史資料館加藤拓未　解説・指揮:安積道也

●**室内楽版（アンサンブル）初演**（2015/2/15）
明治学院チャペル／実施責任者:歴史資料館加藤拓未　指揮:安積道也
東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

●**海外初演**（2019/6/12 モスクワ）パイプオルガン伴奏
ロシアにおける日本年・日本におけるロシア年記念　安部正義オラトリオ《ヨブ》モスクワ演奏会／モスクワ・ルーテル大聖堂（聖ペトリ・パウリ教会）
指揮:加藤拓未 バッハ・アンサンブル大森
主日礼拝でも《ヨブ》から2曲を演奏（2019/6/9）

明治学院歴史資料館所蔵《ヨブ》資料

スケッチ19点／自筆草稿譜・自筆総譜(管弦楽版)／出版譜（ピアノ・ヴォーカル・スコア）初版・再版／明治学院歴史資料館　資料集第9集にはピアノ・ヴォーカル・スコアを、資料集第11集には堀内貴晃編曲の室内楽版を収録している。
＊オラトリオ《ヨブ》演奏は明治学院との共催であれば著作権許諾が簡単である。